

平成10年度ひまわり台団地第3期造成に伴う

富山県上市町

## 放士ヶ瀬北遺跡発掘調査概報

1999年3月

上市町教育委員会

平成10年度ひまわり台団地第3期造成に伴う

富山県上市町

## 放士ヶ瀬北遺跡発掘調査概報

1999年3月

上市町教育委員会

## 序

放土ヶ瀬北遺跡は、平成4年度に上市町教育委員会が行った町内詳細分布調査で発見された遺跡です。平成9年度にひまわり台団地の第3期造成が計画され、遺跡の一部が計画地に係わることとなりました。上市町教育委員会では、それを受け平成10年度に事前の発掘調査を実施いたしました。

遺跡の範囲は約5,000m<sup>2</sup>ですが、調査は、団地造成で削平を受ける625m<sup>2</sup>に限定して記録保存としました。そのため、遺跡の大部分は保存することができました。

発掘調査では、弥生時代中期の遺構・遺物が検出されました。また東北地方に主に分布する天王山式系統の土器も出土いたしました。このほか玉造りの際に出たと見られる石の剥片が多数出土し、この地で、当時玉造りが行われていたことを暗示してくれました。

現地調査は、平成10年の4月から5月に実施ましたが、この間に掘り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るよすがとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査により多大なご協力をいただきました富山県教育委員会（文化課・埋蔵文化財センター）、地元放土ヶ瀬新地区、タカノ興発株式会社のみなさまに心より感謝申し上げます。

平成11年3月

上市町教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は富山県上市町放士ヶ瀬新地内に所在する放士ヶ瀬北遺跡の発掘報告書である。
- 2 現地調査は、平成10年4月1日から同年5月9日までの延べ25日間で実施した。
- 3 遺跡は約5000m<sup>2</sup>の規模を持つが、調査面積は625m<sup>2</sup>である。
- 4 調査は上市町教育委員会が、タカノ興発株式会社の委託を受け実施した。
- 5 調査事務局は上市町教育委員会にあり、調査期間中、文化庁記念物課、富山県教育委員会（文化課・埋蔵文化財センター）の指導を受けた。事務及び調査担当は、生涯学習課文化振興係係長高慶孝、同嘱託芳賀万里子が担当し、生涯学習課長山口哲大が総括した。
- 6 遺物の整理、本書の編集・執筆は調査担当が行ったが、遺物の実測・トレイスは調査担当が中心となり、後述する整理作業員が行った。
- 7 調査期間中及び本書の作成にあたり、下記の方々から有意義な指導・助言並びにご協力を頂いた。記して深甚なる謝意としたい。

富山県埋蔵文化財センター主任 橋本正春　魚津市教育委員会社会教育課主任 真柄一志（順不同・敬称略）

- 8 調査参加者はつきのとおりである。

山崎雅恵（以上富山大学大学院） 戸籠暢宏、瓜生日奈子（以上富山大学学生） 荒木智恵子、伊東藤一、岩城秀子、大沢富子、太田朋美、金子みつゑ、川上富美子、黒田恵美子、黒田キク、桑名マツエ、酒井英子、酒井文子、佐藤茂保、塙田和子、城木馨子、喜内みき子、高木英子、高木富美子、高木準子、竹林昭夫、田中フミ子、谷口京子、中川セツ、中村スミ子、西川文一、長谷朝子、早崎秋子、桶口正一、古井みさ子、松井早苗、松井恒雄、森田礼子、安村ミツ子、若木啓子（以上作業員） 塙田和子、喜内みき子、松井早苗（以上整理作業員）

## 目　　次

序　文	第3図　遺構実測図	図版8　遺構写真
例　言	第4図　遺構実測図	図版9　遺構写真
I　遺跡の環境	第5図　遺構実測図	図版10　遺構写真
第1図　地形と周辺の遺跡	第6図　遺構実測図	図版11　遺構写真
II　調査に至る経過	第7図　遺構実測図	図版12　遺構写真
第2図　地形と区割図		図版13　遺構写真
III　調査の経過と層序	図版	図版14　遺物写真
IV　調査結果	図版2　遺物実測図	図版15　遺物写真
1. 遺構	図版3　遺物実測図	図版16　遺物写真
2. 遺物	図版4　遺物実測図	図版17　遺物写真
V　まとめ	図版5　遺物実測図	図版18　遺物写真
引用・参考文献	図版6　遺物実測図	図版19　遺物写真
	図版7　遺構写真	図版20　遺物写真

# I 遺跡の環境

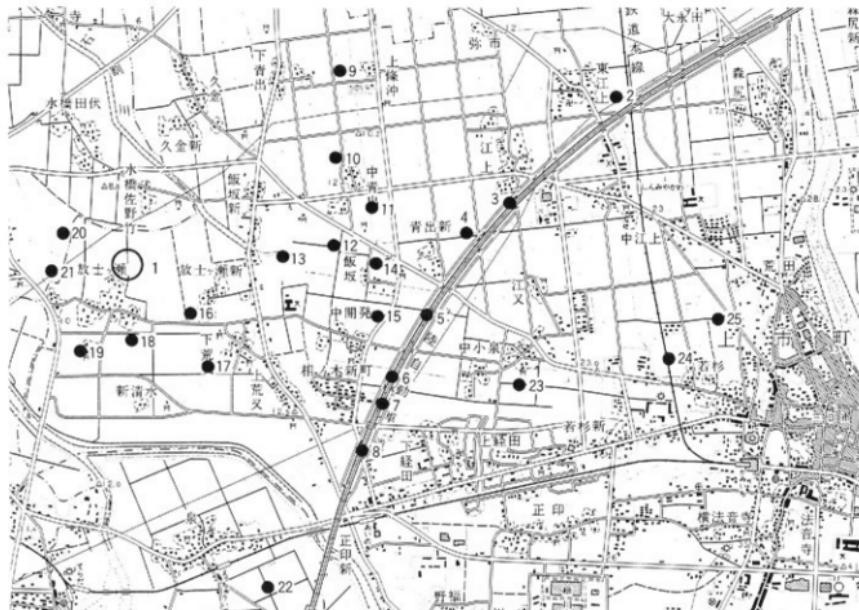
放土ヶ瀬北遺跡は、富山県中新川郡上市町放土ヶ瀬新地内に所在する(第1図・第2図)。上市町は、富山県の県都富山市の東部に位置し、新川平野の中央から東南に長く延びる。東部には標高2,998mの剣岳をはじめとする北アルプス立山連邦が連なり、山岳地帯をもって魚津市・宇奈月町に接する。西部は上市川・白岩川・郷川で形作られた扇状地で、富山市・滑川市・立山町及び舟橋村に接する。現在、扇状地は水田として利用されており、町民の多くもここに集住する。

遺跡は町西部隅、白岩川と上市川に挟まれた、標高約10mの扇状地上に位置する。

富山平野は庄川・神通川・常願寺川・早月川・黒部川などが氾濫を繰り返し、人々の生活を脅かしてきた。しかし中新川郡のこの地域は、河川が比較的小規模であり、水害はあっても人々が住めなくなることはなかったものと見られ、安定した地域であったことから遺跡も数多く残存する。

遺跡は平成4年度分布調査の際に発見された。当初は弥生時代後期の遺跡と考えられたが、今回の調査により、弥生時代中期にまでさかのぼる遺跡であることが確認された。

周辺には、昭和55年に北陸自動車道建設工事の際に調査された、江上A・江上B・飯坂・中小泉・下経田・正印新の各弥生時代遺跡が存在する。江上A遺跡は大量の木製品を出土し、県内の弥生時代沖積平野のイメージを一新した遺跡である。弥生時代の遺跡はさらに立山町域にも広がっており、弥生時代以降この地域の土地利用が進んだことを物語っている。さらに周辺には古代～中世の遺跡も存在し、連鎖とした人々の営みの場であったことが伺える。



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/25,000)

- 1.放土ヶ瀬北遺跡, 2.東江上遺跡, 3.江上B遺跡, 4.江上A遺跡, 5.飯坂遺跡,
- 6.中小泉遺跡, 7.下経田遺跡, 8.正印新遺跡, 9.下青出遺跡, 10.中青出遺跡,
- 11.中青出南遺跡, 12.中開発北遺跡, 13.相ノ木北遺跡, 14.飯坂北遺跡, 15.中開発遺跡,
- 16.放土ヶ瀬新遺跡, 17.下荒又遺跡, 18.放土ヶ瀬西遺跡, 19.放土ヶ瀬南遺跡, 20.清水堂E遺跡,
- 21.清水堂F遺跡, 22.泉藏留遺跡, 23.中小泉東遺跡, 24.若杉神田遺跡, 25.若杉堺田遺跡

## Ⅱ 調査に至る経過

上市町放士ヶ瀬新地内には、平成9年度から、ひまわり台団地第3期造成が計画され、平成10年度に事業が実施されることとなった。しかしながら同地内には、放士ヶ瀬北遺跡の存在が知られており、開発当事者であるタカノ興発株式会社、上市町教育委員会、富山県教育委員会の3者により、遺跡の保護と工事計画の調整を図るために事前協議が催された。

協議ではまず、計画地内の試掘調査を実施することになり、平成9年10月に上市町教育委員会の手によって実施された。その結果、造成が計画された範囲のうち625m<sup>2</sup>が遺跡にかかることが確認され、発掘調査が必要となった。

これにより、現地調査は平成10年の4月からを行い、造成工事は平成10年の5月から実施することで3者が合意した。

調査は、タカノ興発株式会社が上市町教育委員会に委託して実施することとし、調査費用は、タカノ興発株式会社が負担した。



第2図 地形と区割図 (1/1250)

### III 調査の経過と層序

#### 第1次調査（平成9年度試掘調査）

平成9年10月27日から10月28日までの2日間で実施した。団地造成予定地内の4,000m<sup>2</sup>を対象に確認調査を行った。その結果、穴などの遺構が確認され、遺物も遺物整理箱1箱分を出土し、よい残存状況を示した。

なお調査は、上市町教育委員会が試掘として対処し、県補助金を受けて実施した。

#### 第2次調査（平成10年度本調査）

平成10年4月1日から5月9日までの延べ25日間で実施した。遺跡範囲約5,000m<sup>2</sup>の内、団地造成部分625m<sup>2</sup>の記録保存調査を実施した。

その結果、弥生時代中期の穴24基、上塙16基、溝1条、環状遺構2カ所を検出した。遺物は遺構に伴うもの他、包含層からの出土が多く、遺物整理箱35箱分を出土した。

なお調査は、上市町がタカノ興発株式会社の委託を受けて実施し、調査費用は、タカノ興発株式会社が負担した。

#### 層序

層序は、第1層耕作土(30~40cm)・第2層黒灰色粘質土(黄斑)(10~20cm)・第3層灰色粘質土(黄斑)となっている。このうち第2層が遺物包含層で、第3層が地山である。遺構はすべて、地山層(第3層)上面で確認できた。

### IV 調査結果

#### 1. 遺構（第3~7図、図版6~12）

調査により検出した遺構は、弥生時代中期に属するものである。遺構は調査区全体に分布するが、調査区の南側に向かうほど多く検出できる。検出した遺構は、土塙16基、環状遺構2カ所、穴24基、溝1条である。

**土 塙**（第3~7図、図版8~11）調査区全体から検出した。径1m以上のものを土塙として扱かった。検出した土塙は16基で、径約1~3mのものが見られた。炭化物を多く伴い、深さは地山面から15cm程度の浅いものが多い。

**SK1**（第3・4図、図版8~3）X18~19、Y11~12で検出された。平面形は円形を呈し、長径1.14m、短径1.02mを計る。炭層には、植物の纖維跡が見られた。出土遺物は弥生土器、緑色凝灰岩片である。

**SK2**（第3・4図、図版8~3）X16、Y9~10で検出された。平面形は梢円形を呈し、長径1.14m、短径0.87m、深さは6cmを計る。出土遺物は弥生土器、緑色凝灰岩片である。

**SK3**（第3・4図、図版10~2）X18~20、Y17で検出された。一部調査区壁に切られるが、平面形は梢円形を呈すると考える。確認された部分で長径1.89m、短径1.35m、深さは9cmを計る。SP16を切っている。出土遺物は弥生土器である。

**SK4**（第3・5図、図版10~3）X15~16、Y19~20で検出された。平面形は梢円形を呈し、長径1.52m、短径1.46m、深さは12cmを計る。出土遺物は弥生土器、緑色凝灰岩片、白色の凝灰岩片である。

**SK5**（第3・5図、図版9~5）X11~12、Y19~20で検出された。平面形は不正円形を呈し、長径1.82m、短径1.4m、深さは13cmを計る。出土遺物は弥生土器である。

**SK6**（第3・6図、図版10~4）X17、Y25で検出された。平面形は円形を呈し、長径1.04m、短径0.96m、深さは11cmを計る。出土遺物は弥生土器、緑色凝灰岩片である。

**SK7**(第3・6図、図版10-6)X6~7、Y23~24で検出された。平面形は不正円形を呈し、長径1.18m、短径1.1m、深さは10cmを計る。SP19、SK8と直線上に並ぶ。出土遺物は弥生土器である。

**SK8**(第3・6図、図版10-6)X6~8、Y26~27で検出された。平面形は橢円形を呈し、長径2.1m、短径1.2m、深さは6cmを計る。SP19、SK7と直線上に並ぶ。出土遺物は弥生土器である。

**SK9**(第3・5図、図版9-2・3)X14、Y22~23で検出された。当初、SK11も含めた1つのまとまりとして検出したが、遺構としてはっきりした肩を持った部分は、SK9・SK11であった。またSK9・SK11間のX13、Y21では上器がまとまって検出された。SK9の平面形は円形を呈し、長径1.34m、短径1.16m、深さは28cmを計る。出土遺物は弥生土器、緑色凝灰岩片である。なお、天王山式系統を考える土器の小破片も覆土から検出している。

**SK11**(第3・5図、図版9-4)X11~12、Y22~23で検出された。平面形は不正円形を呈し、長径1.78m、短径1.62m、深さは18cmを計る。出土遺物は弥生土器である。なお、天王山式系統を考える土器の小破片も覆土より検出している。

**SK12**(第3・7図、図版11-1・2)X18~19、Y31~33で検出された。長径3.24m、短径1.6m、深さは32cmの比較的人型の遺構である。出土遺物は弥生土器、白色の凝灰岩片である。

**SK13**(第3・7図、図版11-3)X15~16、Y30~31で検出された。平面形は不正形を呈し、長径1.4m、短径1.2m、深さは14cmを計る。出土遺物は弥生上器、内磨砥石、緑色凝灰岩片である。

**SK14**(第3・6図、図版10-8)X10~12、Y30~31で検出された。平面形は橢円形を呈し、長径1.54m、短径1.0m、深さは16cmを計る。出土遺物は弥生土器、緑色凝灰岩片、白色の凝灰岩片である。

**SK15**(第3図)X12、Y38~39で検出された。平面形は橢円形を呈し、長径1.4m、短径0.6mを計る。遺物は検出されなかった。SP23を切っている。

**SK17**(第3・7図)X20、Y34で検出された。平面形は不正円形を呈し、長径1.0m、短径0.8m、深さは9cmを計る。出土遺物は弥生土器、砥石である。

**SK18**(第3・6図、図版11-5)X7、Y39~40で検出された。平面形は橢円形を呈し、長径1.46m、短径0.9m、深さは8cmを計る。出土遺物は弥生土器である。

**環状遺構**(第3・4・7図、図版8・11)2カ所検出された。SX1は環状を呈するが、SX2も大型の遺構のため、便宜上これに含む。

**SX1**(第3・4図、図版8-2)X13~15、Y7~16で検出された。大きく弧を描くような平面形を呈し、底部は平坦である。長軸は直線で約9m、最大幅2.25m、深さは約6cmを計る。出土遺物は弥生土器、内磨砥石、緑色凝灰岩片、白色の凝灰岩片、砂岩の石片である。

**SX2**(第3・7図、図版11-1・4)X14~17、Y31~36で検出された。平面形は不正形である。底部は凹凸が著しく、一定でない。長軸は5.54m、最大幅3.06m、最小幅1.4m、深さは約10cmを計る。出土遺物は弥生上器、ビエス・エスキュー、ハンマー、緑色凝灰岩片、ヒスイ片、メノウ片、石英片である。

**穴・溝**(第3・4・6図、図版8・10)検出した穴は24基で、径約20cm~約1mである。遺物を伴うものと伴わないものがある。遺物を伴うものほとんどは、北陸の弥生時代中期の上器を出土する。SP16のみ、天王山式系統の土器と緑色凝灰岩片を出土した。溝は長さ2.6m、幅0.5mのものを1条検出した。出土遺物は弥生土器である。

## 2. 遺物

遺物には弥生土器・石器・玉末製品と須恵器がある。遺物整理箱で35箱分を出土した。遺物の中でもっとも多いものは弥生土器で、弥生時代中期のものである。また天王山式系統の土器も検出された。遺物は造構に伴うが、包含層からの出土も多い。また調査区全体から、緑色凝灰岩、ヒスイなど玉末製品と見られる破片が検出された。緑色凝灰岩は造構にも伴う。須恵器はすべて遺物包含層からの出土である。以下、造構ごと、図版ごとに概略を述べる。

### 弥生土器(図版1～5・図版14～19)

図版1の1はSP6出土の壺である。口径が胴部最大径よりやや大きく、口縁部がなだらかに外反する。内外面の調整は刷毛目である。外面に炭化物が付着する。2はSP12から出土した壺である。胴上部に櫛描直線文、斜位短線文を施し、口縁部内面にも斜位短線文を2帯施す。口唇部は、一本の沈線を引いた後、櫛で刻みを施しさざみなみ状にしている。3～10はSP16から出土した。いずれも繩文を施し、直線と波状文が横走する。同一個体の可能性が高い。3・4・7・8は、直線で区画された部分に、刷毛状の工具によって横位の平行な直線が描かれている。これらは天王山式系統の土器ではないかと考えたが、一般的に天王山式とされるものと異なる要素をもち検討を要する。11はSP18からの出土である。壺の口縁部で、内面に斜位短線文を巡らす。12はSD1から出土した。口径13.0cmで小型の壺である。13はSK1からの出土である。胴部が大きく膨らみ、外面に刷毛目がわずかに残るが摩滅が著しい。14はSK3から出土した壺で、胴部最大径が胴中部にある。胴上半に櫛描直線文、櫛描簾状文、斜位短線文、扇形文を施し、2個1対の円形浮文を施す。口縁部内面にも、斜位短線文と2個1対の円形浮文を添付する装飾性の高い壺である。櫛描直線文は回転台を使用していない。15・16はSK4からの出土である。15は壺である。肥厚する口縁部外面に櫛描羽状列点文を施す。16は壺で、口縁部外面に2個1組の列点を施す。17・18はSK5、19はSK6から出土した。いずれも壺の口縁部である。20はSK8出土の壺で、口縁部は波状である。21～26はSK9からの出土である。21は純文地に太い沈線と、刷毛状の工具で引いたと考えられる浅い沈線を施す。22は21と同様な文様構成に加え、爪形の列点を施す。21・22はSP16出土遺物と同様、天王山式系統の土器ではないかと考えた。23・24は壺の口縁部である。23は頸部に櫛描直線文を施す。口縁部内面に斜位短線文を2帯施し、2個1対の瘤状の突起を添付する。24は口唇部に櫛描刻目文を施す。内外面の調整はナデである。25は脚底部と考えられるが、全體の器形は不明である。底面に残存部で4条の沈線を施す。26は壺の底部である。27～30は、SK9・SK11付近のX13・Y21から出土した。いずれも壺の口縁部である。

図版2の1はSK9・SK11付近のX13・Y21から出土した。胴部最大径が口径より大きい。口径29.0cmを計る大型品である。体部上半に櫛描直線文、櫛描簾状文、櫛描波状文を施すが、回転台は使用せずに施文したものと考える。口唇部は沈線を施してから刻み、波状になる。2～10はSK11から出土した。2は壺の口縁部で、内外面の調整は刷毛目である。3は壺の頸部である。複体構成の櫛描直線文、櫛描簾状文、櫛描扇形文を施す。内面は刷毛目調整である。櫛描直線文は回転台を使用しているものとみられた。4～6はSP16出土遺物と同様、天王山式系統の土器ではないかと考えた。4は爪形の列点文を施し、5は純文地に沈線を施す。6は櫛状の工具で引いたと考えられる浅い沈線を施す。7～10は壺である。7・8は口径が胴部最大径より大きい。口縁端部は櫛描刻目文を施す。内外面の調整は刷毛目である。9は口縁部に一本の沈線を施した後、指頭压痕を施す。内面には、櫛描直線文が残存部で2カ所横走する。10は、口径が胴部最大径より大きい。口縁端部は一本の沈線を施した後、蒐刻みを施して波状とした。口縁部内面に横走りの刷毛目を施す。外面に炭化物が付着する。11～23はSK12より出土した。11～16は壺の口頸部である。11は口縁部が大きくラッパ状に開き、端部を丸く納める。摩滅が著しいため調整は不明である。12は頸部が長く、

口縁部が肥厚する。肥厚した口縁部内外面に、櫛描羽状列点文を施す。13は口縁部が大きく開き、端部は受口状になる。端部は厚く成形され、外面には櫛描羽状列点文が1条半付く。刻みをもつ2条1組の縱の浮文が添付される。垂下部は波状になっている。口径は、23.0cmである。14は壺の頭部である。櫛描羽状列点文を施した隆帯が2条添付されている。15は口縁部外面に斜格子文が付く。内面には斜位短線文を2帯もつ。16は口縁部内側に2帯の櫛描羽状列点文を施す。18~20は壺である。18は胴部最大径と口径がほぼ等しい。胴部上半に櫛描直線文、櫛描箋状文、斜位短線文を施す。口縁端部は波状である。口縁内面に2帯の斜位短線文を施す。19は、口唇部に刻み目を施す。20は胴部に対して口縁部が大きく開く。口縁部内面に4条の斜位短線文を施す。21は小型の壺、22・23は壺の底部である。

図版3の1・2はSK13から出土した。1は壺で、胴部最大径が口径よりやや大きい。口縁部内面には2帯の櫛描羽状列点文が施される。口縁下端には櫛描刻目文を施す。2は壺の底部である。3~5はSK14から出土した。3・4は壺の口頭部である。4は口縁部内面に4個1組の円形浮文と、2個1組の透かし孔が付く。摩滅が著しく、調整は不明である。5は壺の口縁部で、口唇部に刻み目をもつ。6はSK17、7はSK18からの出土である。8~28はSX1からの出土である。8~11は壺の口頭部である。10は器壁が薄く、焼成が良好である。11は広口壺である。口縁内面に4帯の斜位短線文を施し、その上に2個1対の円形浮文を添付する。12は胴部の膨らみが弱く、口縁部が緩く開く。繰り刷毛状の工具で調整した後、櫛状具で縱位の直線文と「ハ」の字状の文様を描く。縱位に施した櫛描文の両脇には櫛描の列点文が付される。口縁端部には縦文が施文され、等間隔に櫛状具で刻む。刻み目で胎土が押し上げられ、口縁部はわずかに波状になる。口頭部に施された刷毛目の方向は縦であり、体部上半の刷毛目は横方向である。口径は19.0cmである。外面に炭化物が付着する。天王山式系統の土器ではないかと考えたが、櫛描文をもつなど天王山式系統の土器とは異なる様相を合わせもち判然としない。13~19は壺である。14・17・18は、体部上半に櫛描直線文、櫛描箋状文、斜位短線文などを施す。口縁部内面には、斜位短線文をもつ。17は口縁部が平坦である。17の櫛描直線文は回転台が使用されたと考えられる。18は胴部に対し、口縁部が大きく外反し、口縁内面の斜位短線文は3帯である。外面に炭化物が付着する。16は口縁端部に櫛描刻目文を施し、波状になる。19は口縁部内面に縱走する櫛描直線文が施される。口唇部外面は刻目文が付される。外面に炭化物が付着する。20~28は壺の底部である。21は外面に削りを施す。24は刷毛目調整後、櫛描直線文を施す。

図版4の1~13はSX2から出土した。1は壺の口頭部で、口縁部が大きく外反する。2~5は壺である。2は台付き壺である。口縁部、胴下半を欠損するが、胎土、調整から、胴上部と底部は同一個体と考える。頭部に櫛描直線文を施す。5は口径が胴部最大径より大きい。口唇部に櫛描刻目文を施す。外面面を刷毛目で調整する。外面に炭化物が付着する。6は壺の体部である。内外面の溝條は刷毛目である。胴部上半外面に炭化物が付着する。7は壺の体部破片である。櫛描直線文、櫛描箋状文、扇形文を重ねて施文する。8~12は底部破片である。8は丸底で底部中央が膨らむ。13は鉢である。口縁部がわずかに肥厚し、肥厚した口縁の外面に櫛描羽状列点文がつく。14~25は、遺物包含層からの出土である。14~19は壺の口頭部である。14は小形で、口径は9.0cmを計る。16は肥厚した口縁部をもち、外面に櫛描羽状列点文をもつ。17は小型の壺で、体部上半に櫛描直線文、櫛描箋状文、斜位短線文を施文する。口縁部内面には斜位短線文を2帯施文する。18は口縁部が受け口状に立ち上がる器形である。口縁部に縦位の浮文を2条施す。口縁部外面の垂下部は波状になる。口縁端部には山形の刻み目文が施文される。19は口縁部が大きく開く。胴上部には櫛描直線文が施文される。口縁部内面には、斜位短線文が5帯施される。口縁端部外面は、刻み目が施される。20~22は、前述したSP16からの出土遺物と類似したものである。20・21は沈線を施す。22は沈線で区切った部分に、櫛状具によって施文したと考えられる浅い沈線が施される。23~25は胎土や施文から同一個体と考えられる。頭部で屈折し、口縁部は外反する。刷毛目調整を施し、口縁部と頭部屈折部に、沈線による文様を描く。内面にも沈線で文様が描かれる。23~25も天王山式系統と考えた。

図版5の1～10は遺物包含層からの出土である。1～5は甕である。4は胴部最大径と口径がほぼ等しい。口縁部外面には斜格丁文が付く。口縁部内面には柳描羽状列点文が1帯半施文される。内外面の調整は刷毛目である。6は甕で、口縁部内面に柳描羽状列点文をもつ。口縁部外面は柳描刻目文を施す。内外面の調整は刷毛目である。丹彩を施す。7は台付き甕の台部である。台部径は8.2cmである。8・9は鉢の口縁部である。肥厚した口縁部外面に柳描羽状列点文を施す。10は鉢で、太い沈線で直線と長樋円形状の文様を描く。系統は判然としない。

**石器・石材(図版5・13)** 石器・石材は遺構に伴うものがある。また本調査区の中心時期が弥生時代にあるため、弥生時代の遺物と考える。

**石鐵(図版5-11～13)** 遺物包含層から出土。11は無茎石鎌で、長さ3.0cm、幅2.1cm、厚さ0.85cm、重さ3.0gを計る。凝灰岩である。12は有茎石鎌で、先端部と茎部を欠損する。残存部で長さ3.3cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm、4.5gを計る。安山岩である。13は有茎石鎌で、長さ2.4cm、幅1.6cm、厚さ0.45cm、1.0gを計る。

**ピエス・エスキュー(図版5-14)** SX2より出土。長さ3.4cm、幅4.1cm、厚さ0.55cm、9.5gを計る。安山岩製。

**内磨砥石(図版5-15～17)** 15はSX1からの出土である。扁平の幅狭い板状を呈し、両側縁に磨痕が認められる。16・17はSK13より出土した。扁平で幅広い板状を呈する。16は側縁の片方を欠くが、残存する側縁に磨痕が認められる。17は両側縁に磨痕が認められる。15～17はいずれも薄い紫色の変成岩である。勾玉などの湾曲部の内面を研磨したものと考えられる。

**砥石(図版5-22)** 磨跡をもち、砥石と考えられる。敲打痕をもつことと形態から、打製石斧を砥石として転用したものか、あるいは砥石を他の用途に転用したと考える。凝灰岩製で、SK17からの出土である。

**ハンマー(図版5-23)** 凝灰岩の自然石の一部に打撃を加えたと見られる跡がある。SX2からの出土である。

**緑色凝灰岩の剥片(図版5-18～20・図版13-①～⑩)** 図版5の18は、直方体に整えられている。18・20は遺物包含層からの出土、19はSK6からの出土である。図版13の⑥・⑦・⑩も、直方体を意識して削られている。また⑩・⑫のように扁平な面を作っているものがある。①・②はSK1、③・④はSK2、⑤・⑥はSK3、⑦・⑨はSK9、⑪はSK13、⑫はSK14、⑬～⑮はSX1、⑯はSX2より出土した。他は遺物包含層からの出土である。玉を製作した際の未製品・剥片ではないかと考える。

**白色の凝灰岩の剥片(図版5-21・図版13-⑭～⑯)** 緑色凝灰岩より点数は少ないが、遺構・包含層より出土する。図版5の21はSX1からの出土である。図版13の⑭はSK4からの出土、⑮はSK12、⑯はSK14、⑰はSX1、⑱・⑲は遺物包含層からの出土である。

**メノウ(図版13-⑩～⑯)** ⑩・⑯は包含層より、⑯はSX2より出土した。

**鉄石英(図版13-⑩)** 包含層からの出土である。

**ヒスイ(図版13-⑭～⑯)** ⑭～⑯は剥片、⑰は原石である。⑯は扁平に加工され、SX2より出土した。⑩・⑯・⑰は包含層からの出土である。

**長石(図版13-⑭)** SX2より出土した。

**砂岩(図版13-⑭・⑯)** 1面に擦跡をもち、他の面は打ち割られている。砂岩で砥石として利用されたもの一部かと推定する。⑭はSP6、⑯はSX1からの出土である。

**須恵器(図版19-①～③)** 須恵器は調査区全体で10点を出土したが、すべて遺物包含層からの出土である。図版19-①～③は、このうちの3点である。①は双耳壺の肩の一部である。②は杯で9世紀第2～3四半期のものと考える。③は杯で回転糸切り痕をもつ。9世紀のものと考える。

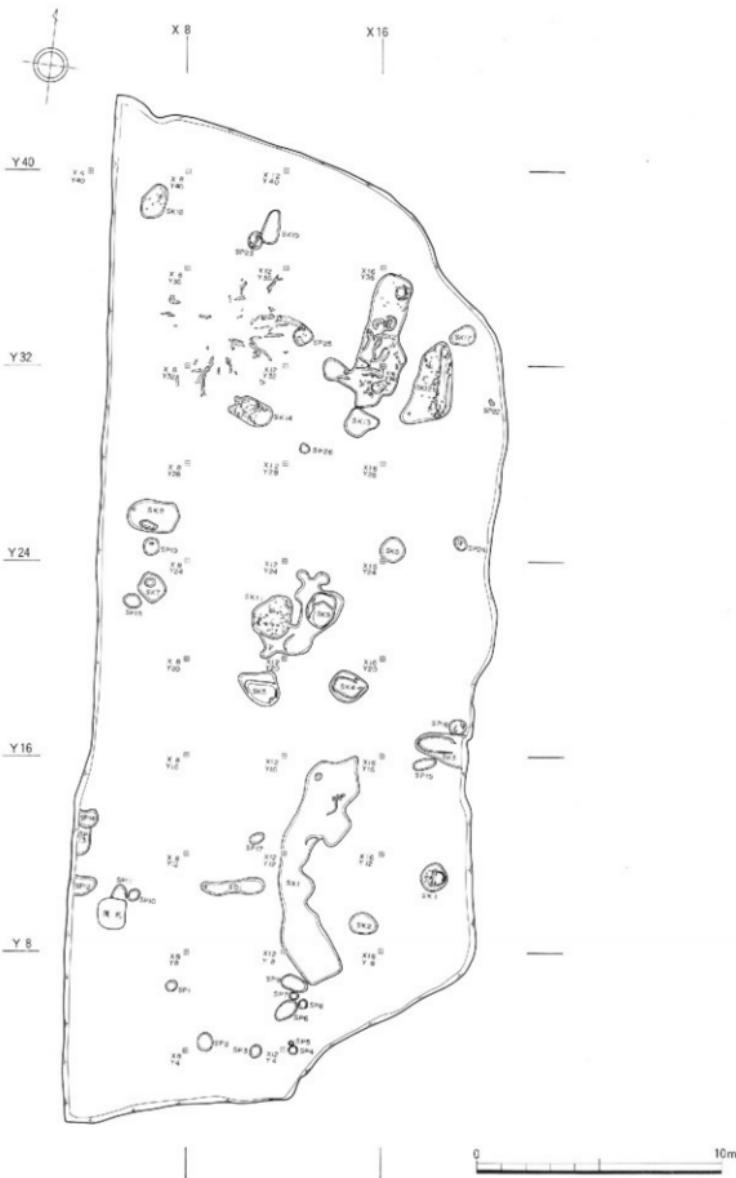
## V まとめ

調査により前章まで述べたような結果を得たが、以下これらをまとめておく。

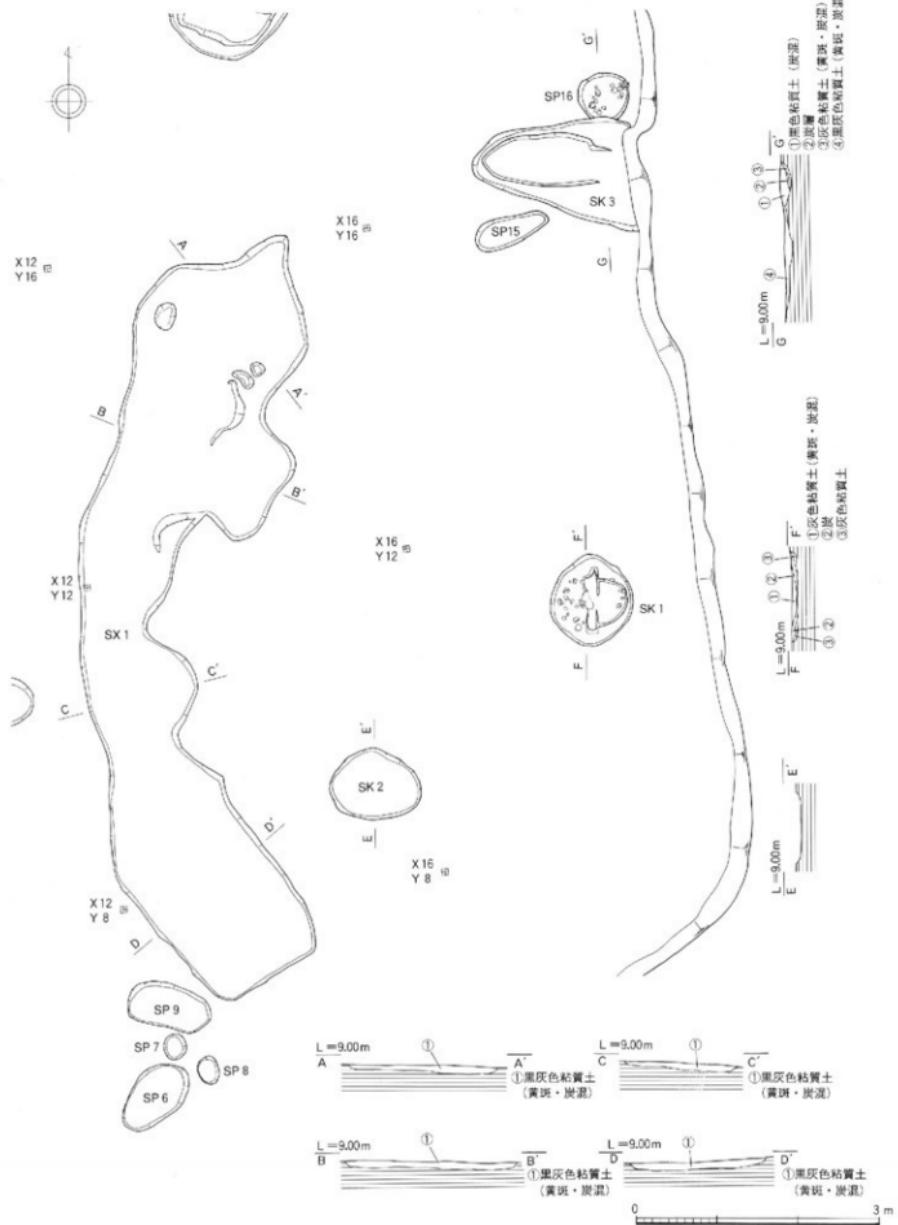
1. 調査により検出した遺物は、弥生時代中期の土器・天王山式系統の土器・石器・石材の剥片・須恵器などである。このうち弥生時代中期の土器がもっとも出土量が多い。櫛描文系土器で、石川県における「小松式」、富山県における「石塚Ⅰ期～Ⅲ期」のものである。これらはほとんどの遺構に伴い、遺物包含層からも出土する。
2. 天王山式系統と考えられる土器が、少量だが検出された。これらは刷毛目や櫛状の工具で引いたと考えられる文様をもち、一般的に天王山式とされるものと区別を異にするため検討が必要である。しかしSP16ではこれらの土器と緑色凝灰岩片が出土し、SX1では北陸の弥生時代中期の土器と共伴する。またSK9・SK11では覆土から少量ながら出土した。北陸と東北地方の平行関係を考える上で、貴重な資料となるものと考える。
3. 住居などの遺構は確認されず、遺構の密度も低かった。調査区の南西側に、集落の中心は存在すると推定する。
4. 緑色凝灰岩・白色の凝灰岩・ヒスイ・メノウ・鉄石英・長石などの石材、砾石・ハンマーなどの出土は、菅玉や勾玉などの玉作、石錐などの石器製作の可能性を示すと考える。しかし、今回の調査では菅玉・勾玉などの製品が出土せず、実際に加工していたと考えられる遺構も検出されなかった。このため、石製品の加工を行った工房跡などは、集落の中心である南西側にあるものと考える。
5. SX1・SX2など調査区内でひとときわ大きい遺構は、方形周溝墓の可能性があるが、四方にめぐらしき溝は確認されなかった。SK1からは炭化物に纖維状の跡が見られ、土壤は、土器のほか緑色凝灰岩を伴うものが多い。土壇墓ではないかと考える。
6. 須恵器はごくわずかしか出土せず、すべて遺物包含層からの出土である。これらを伴う遺構は検出できなかった。

### 引用・参考文献

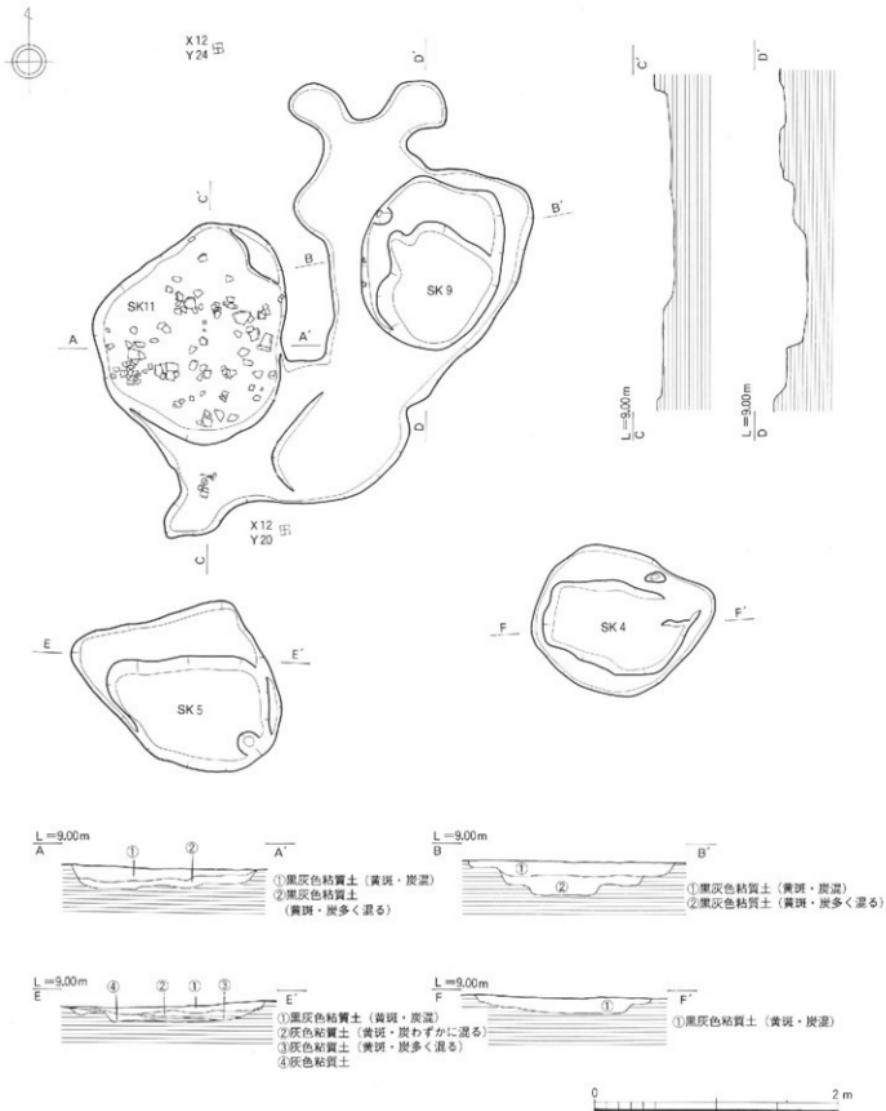
- ア 菅井 降 1997 「石塚遺跡、宮崎地区」『市内遺跡調査概報VI』 高岡市教育委員会  
石川県立埋蔵文化財センター 1987 「吉崎・次場遺跡 県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 第1分冊(資料編(1))」  
石川日出志 1990 「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学 第3号』  
石川日出志 1998 「下老子笠川遺跡の天王山式土器」『下老子笠川遺跡発掘調査報告書』 福岡町教育委員会  
上野 章 1972 「弥生時代付古式土器」『富山県史考古編』 富山県  
上野 章 1985 「弥生土器について」『富山県小杉町・大門町小杉流通業務用地内遺跡群 一第7次緊急発掘調査概要一』 富山県教育委員会  
カ 采山 雅夫 1998 「遺物」『下老子笠川遺跡発掘調査報告書』 福岡町教育委員会  
タ 田中 靖 1990 「北陸地方の天王山式土器」 「天王山式期をめぐって」の検討会記録集 弥生時代研究会  
寺村 光晴 1971 『古代玉作の研究』 吉川弘文館  
ハ 橋本 澄夫 1968 「石川県小松市八日市地方遺跡の調査 一県下の櫛文系土器」『石川考古学研究会誌』 第11号石川考古学研究会  
橋本 澄夫 1975 「弥生土器 一中部北陸一」『考古学ジャーナル』No. 106, 107, 109, 111ニュー・サイエンス社  
浜岡賢太郎 1989 「北陸地方I」『弥生式土器集成 本編(合本)』 東京堂出版  
浜岡賢太郎・谷内尾曾司・三浦純夫 1975 「羽咋市吉崎・次場遺跡 一第3次発掘調査概報一」 羽咋市教育委員会  
ヤ 山口 岬一 1988 「石塚遺跡調査概報II」 高岡市教育委員会



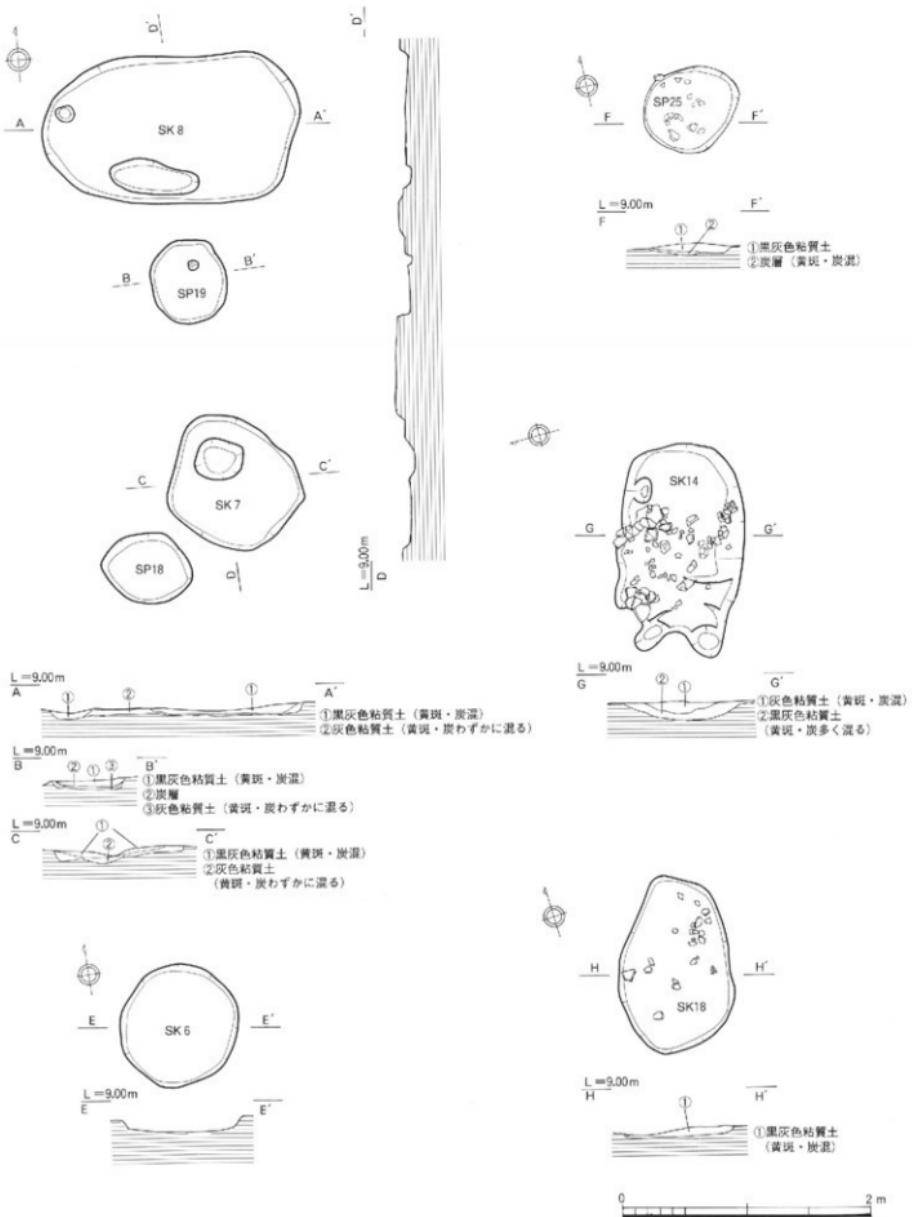
第3図 遺構実測図 (縮尺1/200)



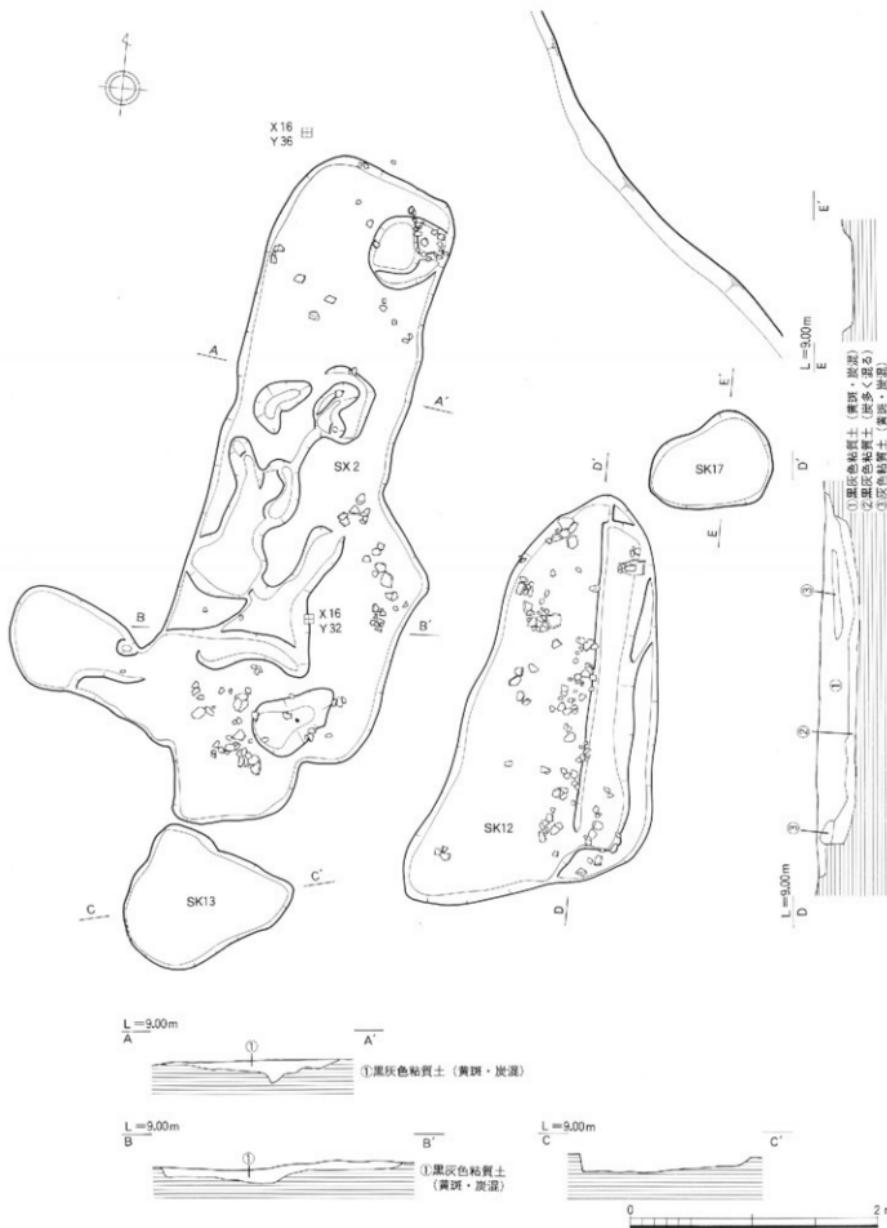
第4図 遺構実測図 (縮尺1/60)  
SP16、SK1、SK2、SK3、SX1



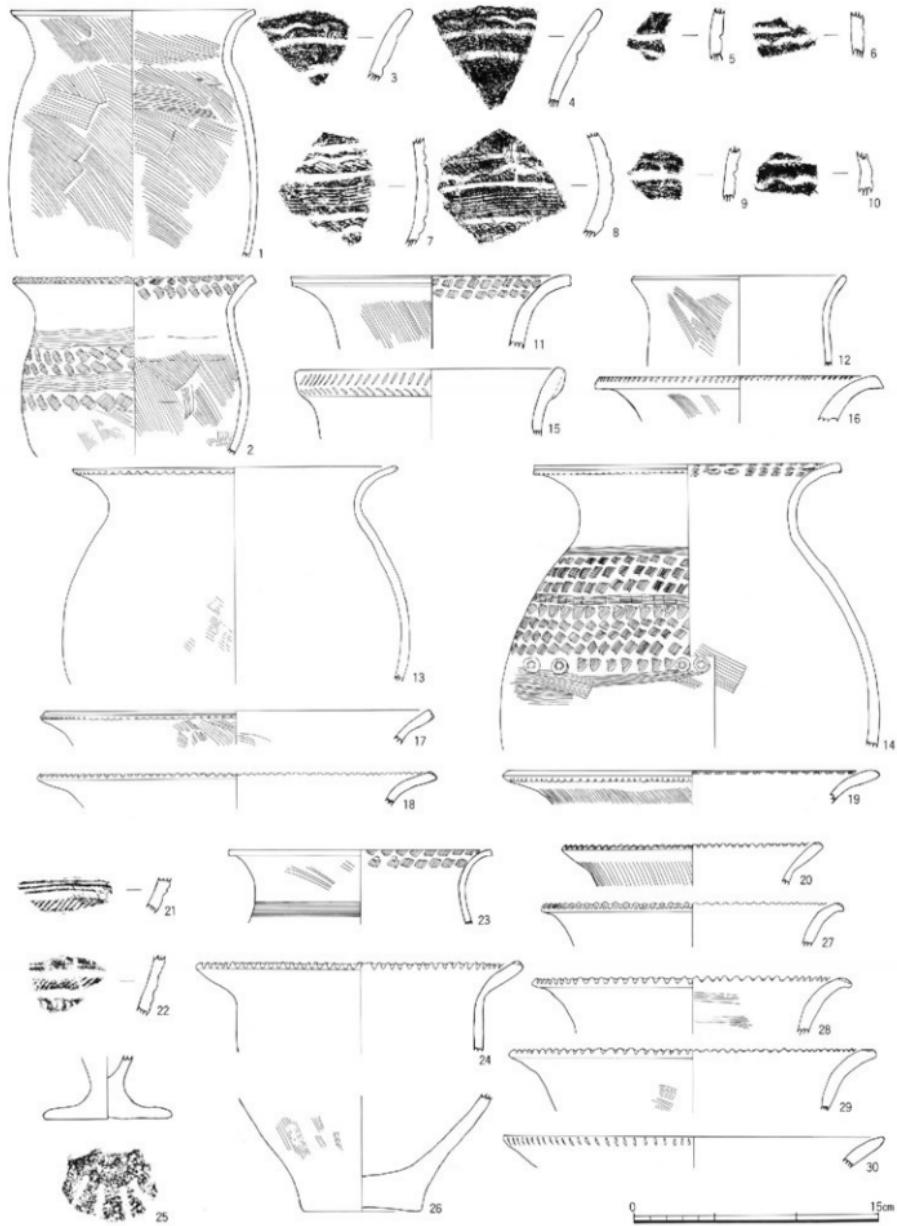
第5図 遺構実測図 (縮尺1/40)  
SK4, SK5, SK9, SK11



第6図 遺構実測図（縮尺1/40）  
SP18, SP19, SP25, SK6, SK7, SK8, SK14, SK18

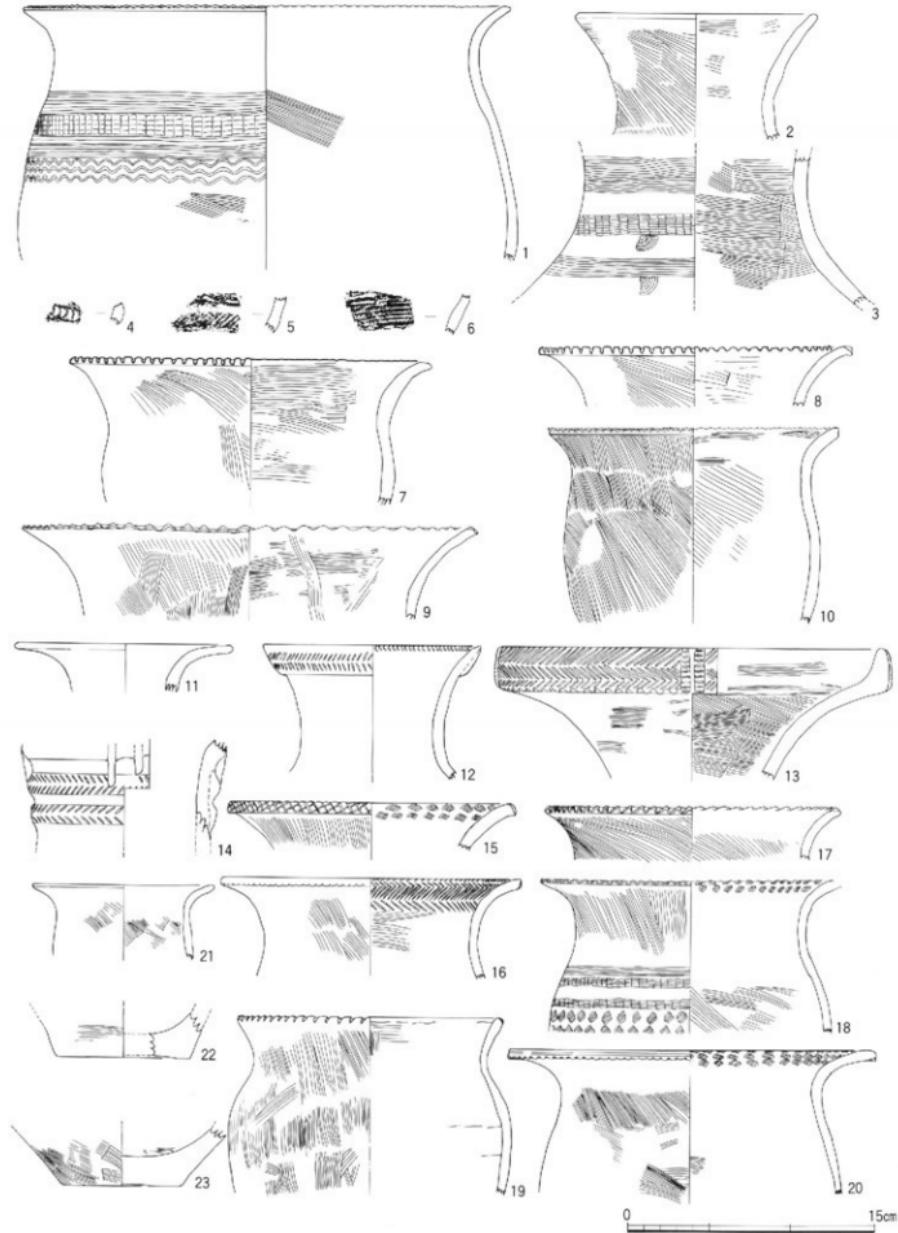


第7図 遺構実測図 (縮尺1/40)  
SK12, SK13, SK17, SX2

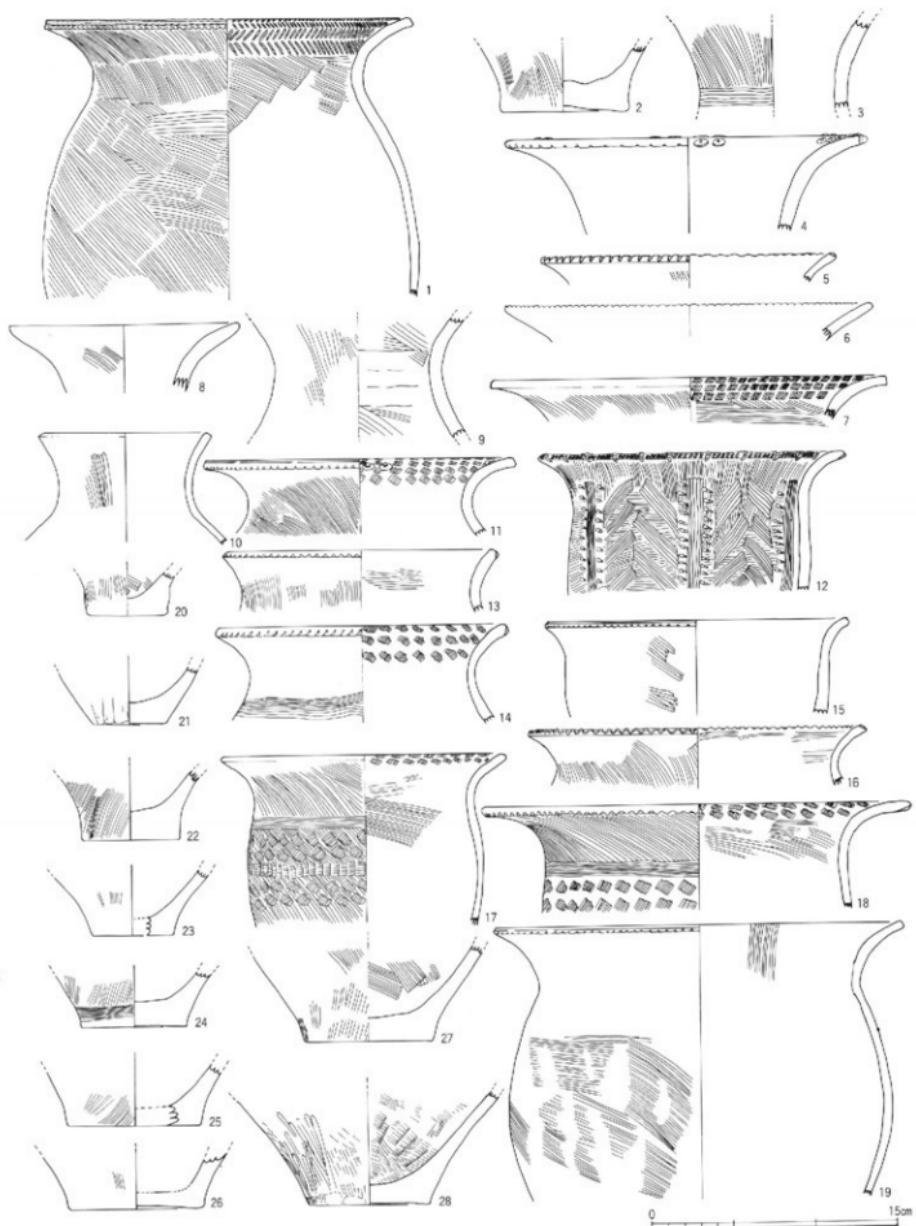


図版1 遺物実測図 (縮尺1/3)

弥生土器 1:SP6, 2:SPI2, 3~10:SPI6, 11:SPI8, 12:SD1, 13:SK1, 14:SK3, 15~16:SK4、  
17~18:SK5, 19:SK6, 20:SK8, 21~26:SK9, 27~30:SK9・11付近

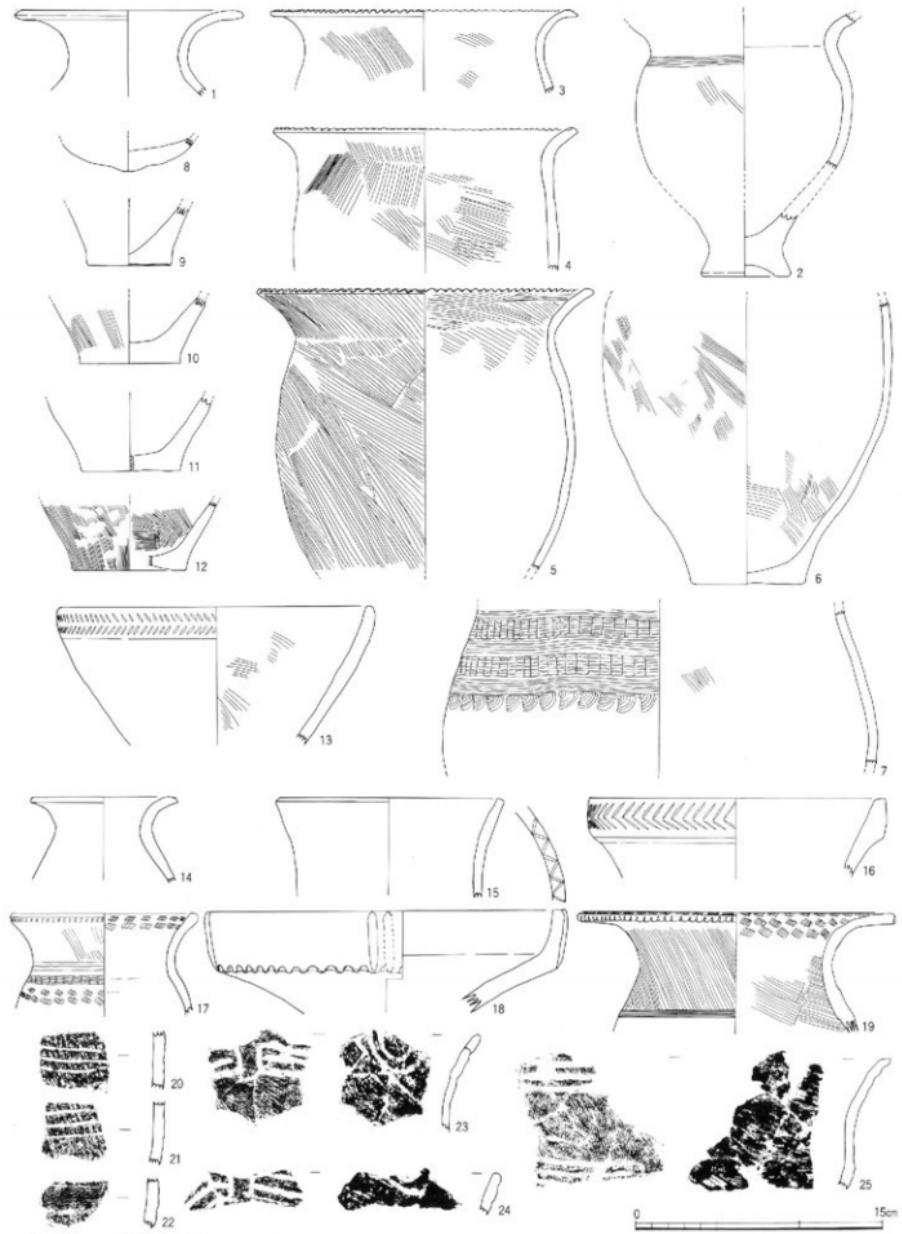


図版2 遺物実測図 (縮尺1/3) 弥生土器 1:SK9・11付近, 2~10:SK11, 11~23:SK2



図版3 遺物実測図 (縮尺1/3)

弥生土器 1・2:SK13、3~5:SK14、6:SK17、7:SK18、8~28:SX1

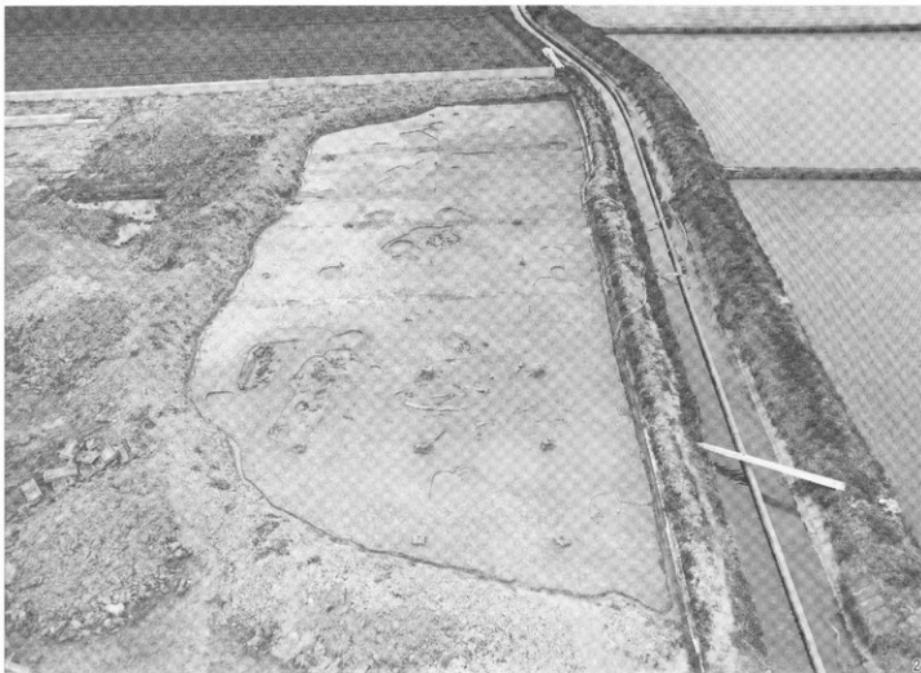


図版4 遺物実測図 (縮尺1/3)  
弥生土器 1~13: SX2, 14~25: 遺物包含層



図版5 遺物実測図 (縮尺1~10・14~23:1/3, 11~13:1/2)

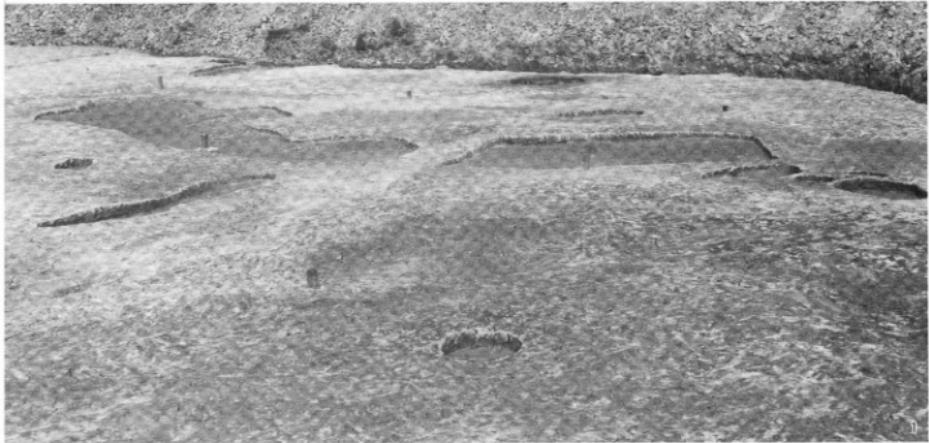
弥生土器 1~10: 遺物包含層, 石器11~13・18・20: 遺物包含層, 14・23: SX2, 15・21: SX1, 16・17: SK13, 19: SK6, 22: SK17



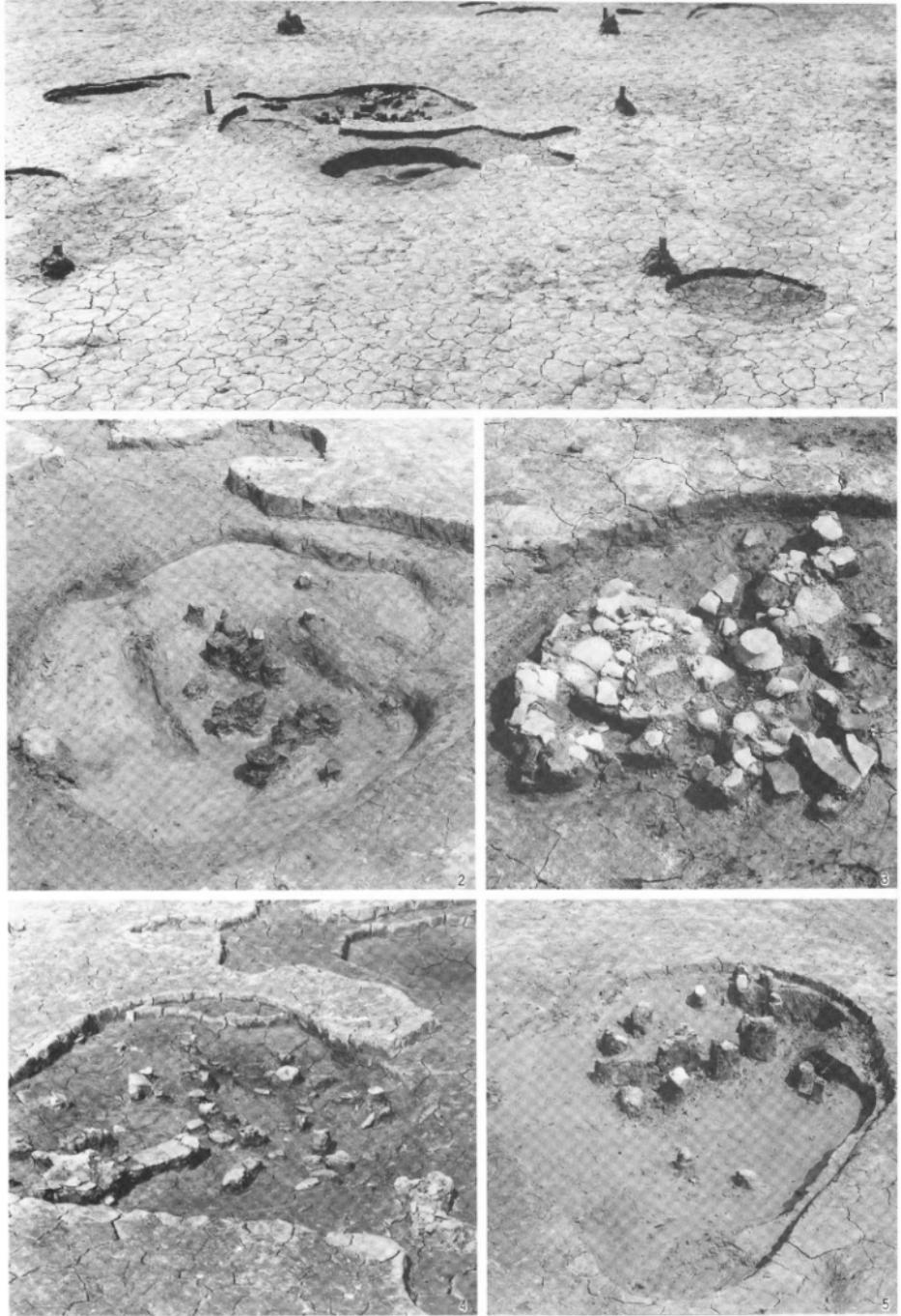
図版6 1.遺跡遠景（南西より・空中写真）, 2.調査区全景（北より・空中写真）



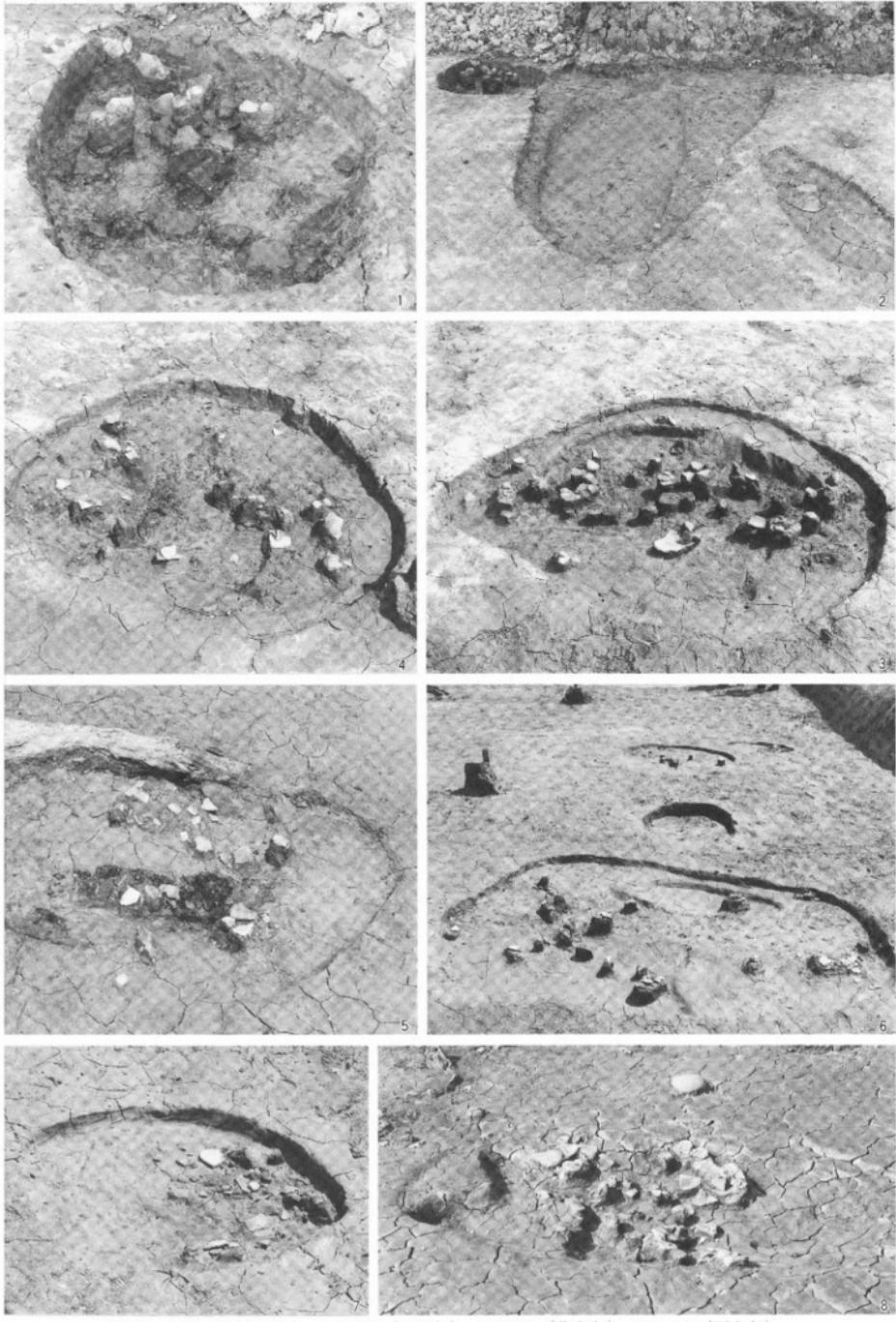
図版7 1.調査区全景（南より）, 2.調査区全景（北より）



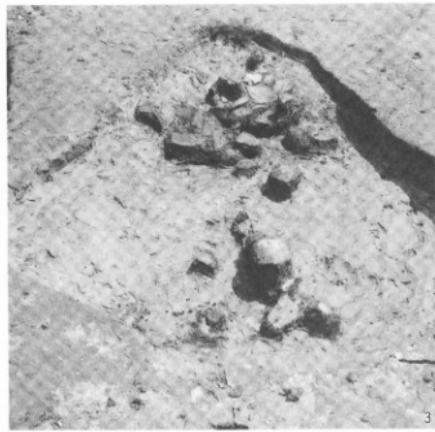
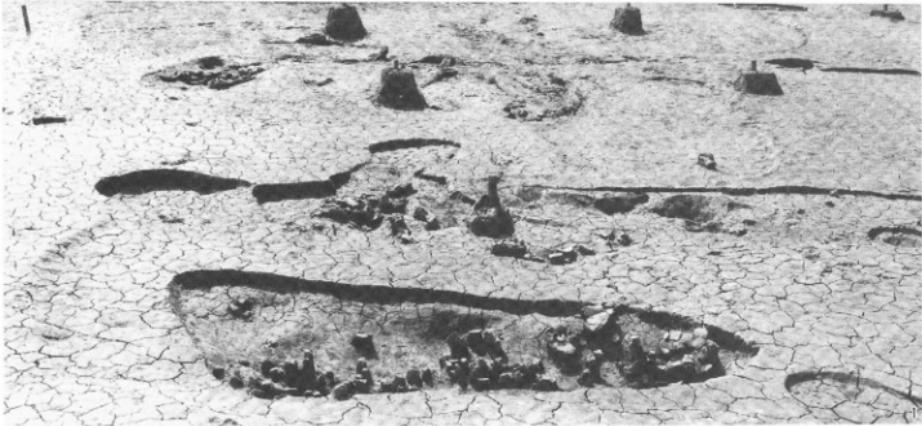
図版8 1.調査区南側部分（南西より）, 2.SX 1 遺物検出状況（南西より）  
3.SK 1 遺物検出状況（北より）, 4.SP 6 遺物検出状況（西より）



図版9 1.調査区中央部分（東より）, 2.SK9遺物検出状況（南より）  
3.X13・Y21遺物検出状況（北より）, 4.SK11遺物検出状況（南西より）  
5.SK5遺物検出状況（西より）



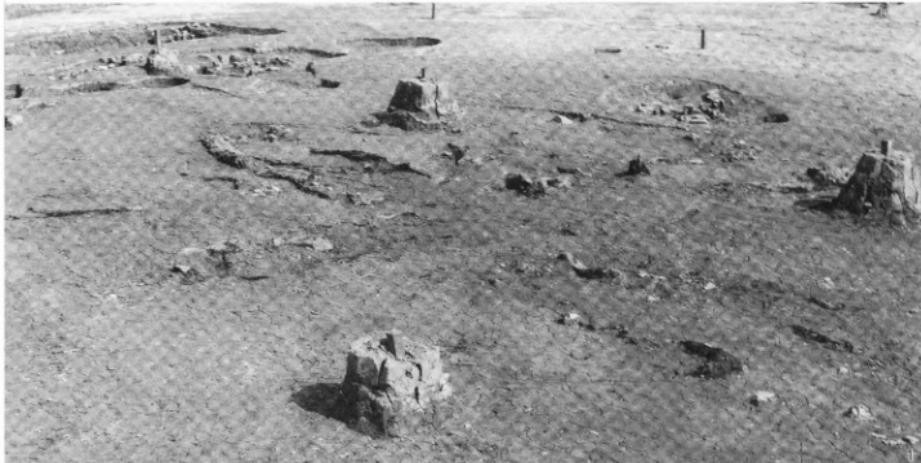
図版10 1.SP16(西より), 2.SK3(西より), 3.SK4(北より), 4.SK6(西より),  
5.SP25(南より), 6.SK7・SP19・SK8(北より), 7.SP18(北より), 8.SK14(南より)



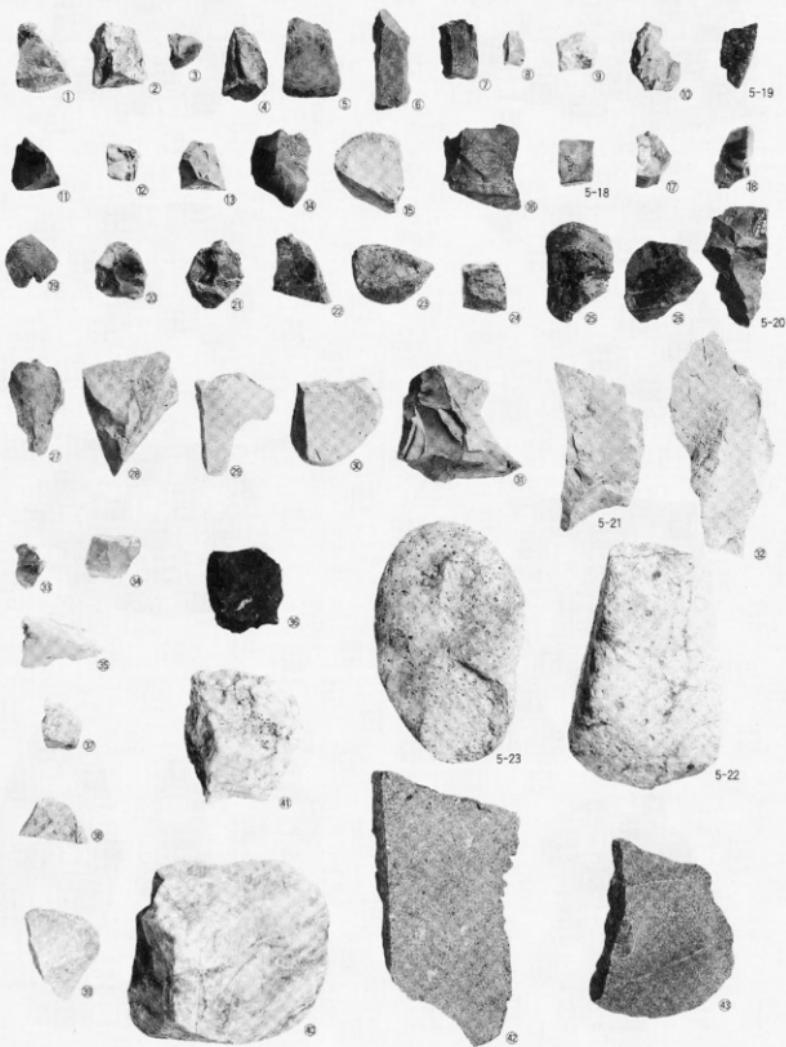
図版11 1.調査区北側部分（東より）、2.SK12遺物検出状況（南より）

3.SK13遺物検出状況（西より）、4.SX2遺物検出状況（南より）

5.SK18遺物検出状況（北より）



図版12 1.調査区北側部分（北西より）、2.作業風景、3.作業風景



図版13 遺物写真 (縮尺1/2) 石器・石片 (図版5参照)



2-1



2-10



3-1



3-12



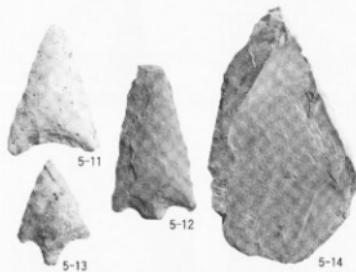
4-5



3-19



4-6



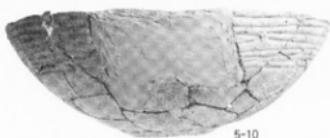
5-11

5-12

5-13

5-14

5-15

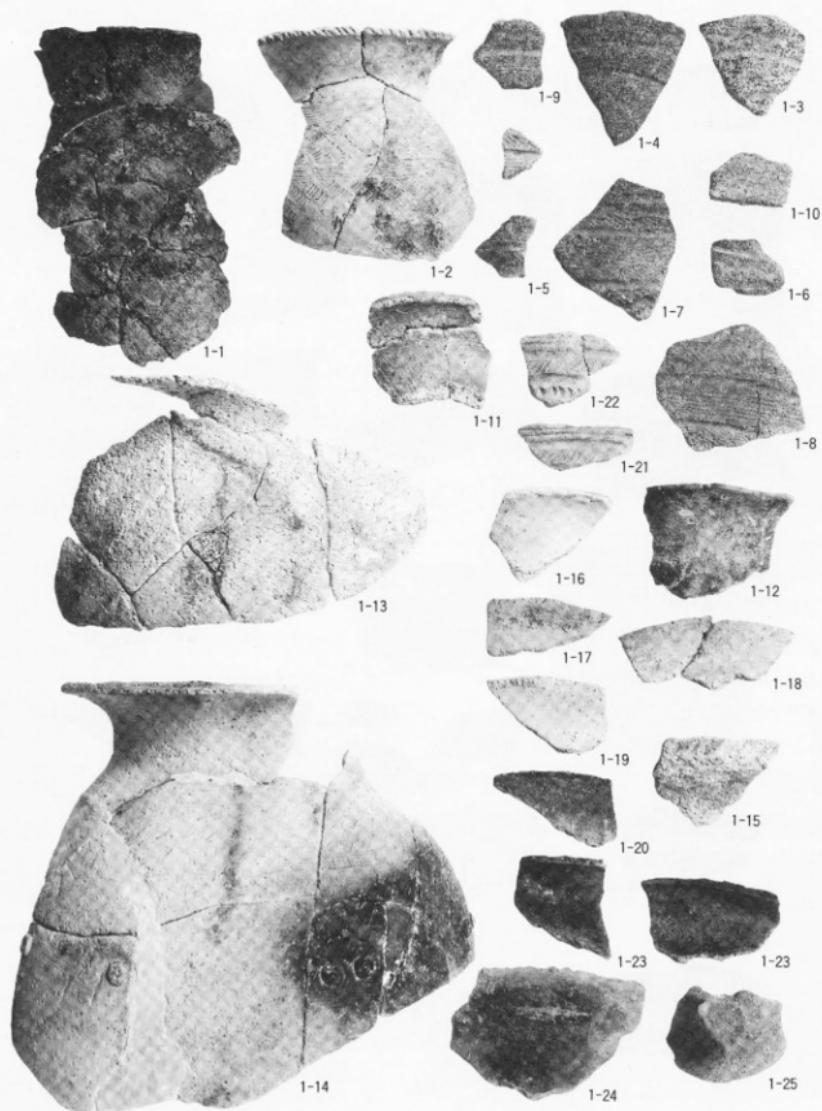


5-10

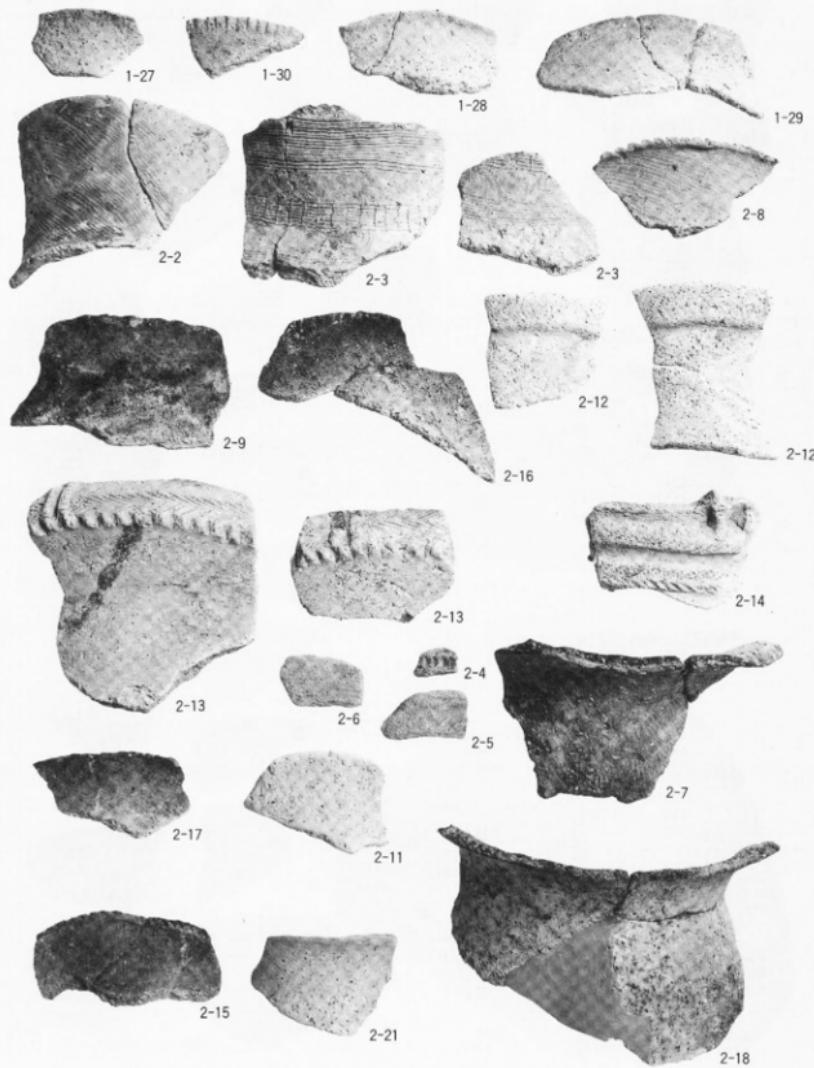


5-16

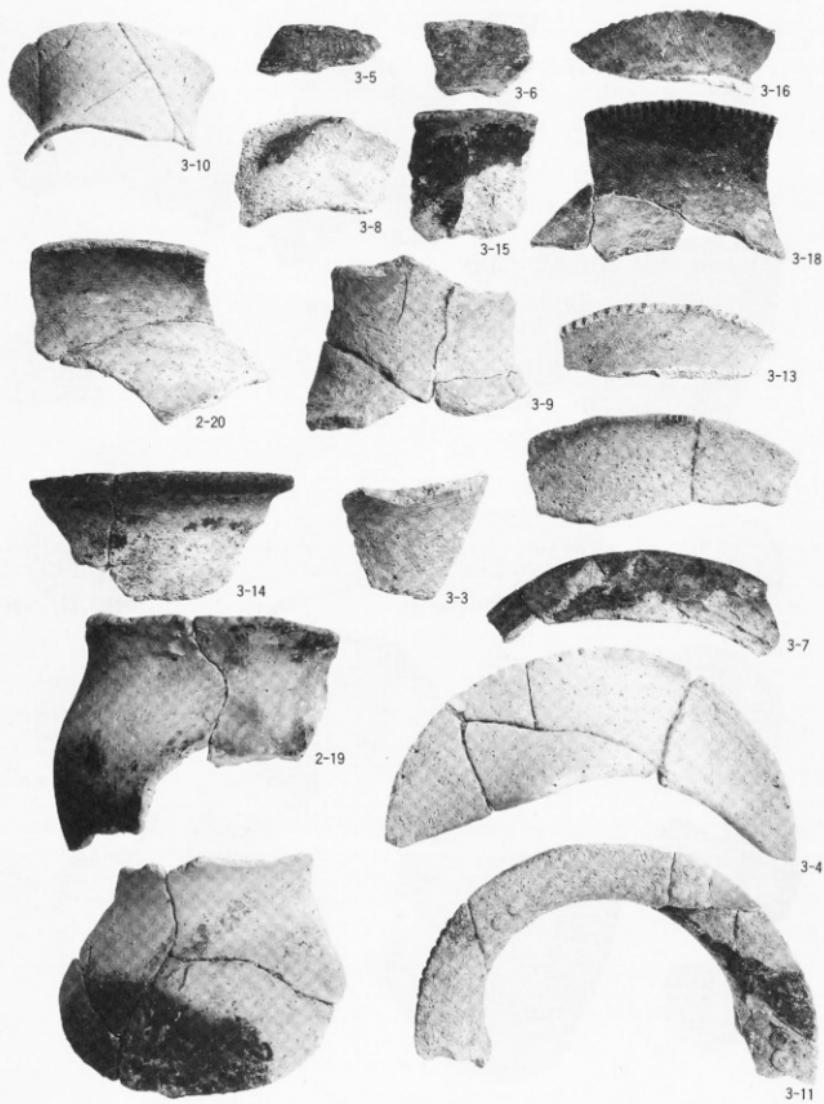
図版14 遺物写真 弥生上器（縮尺1/4）・石器（実大）（図版2～5参照）



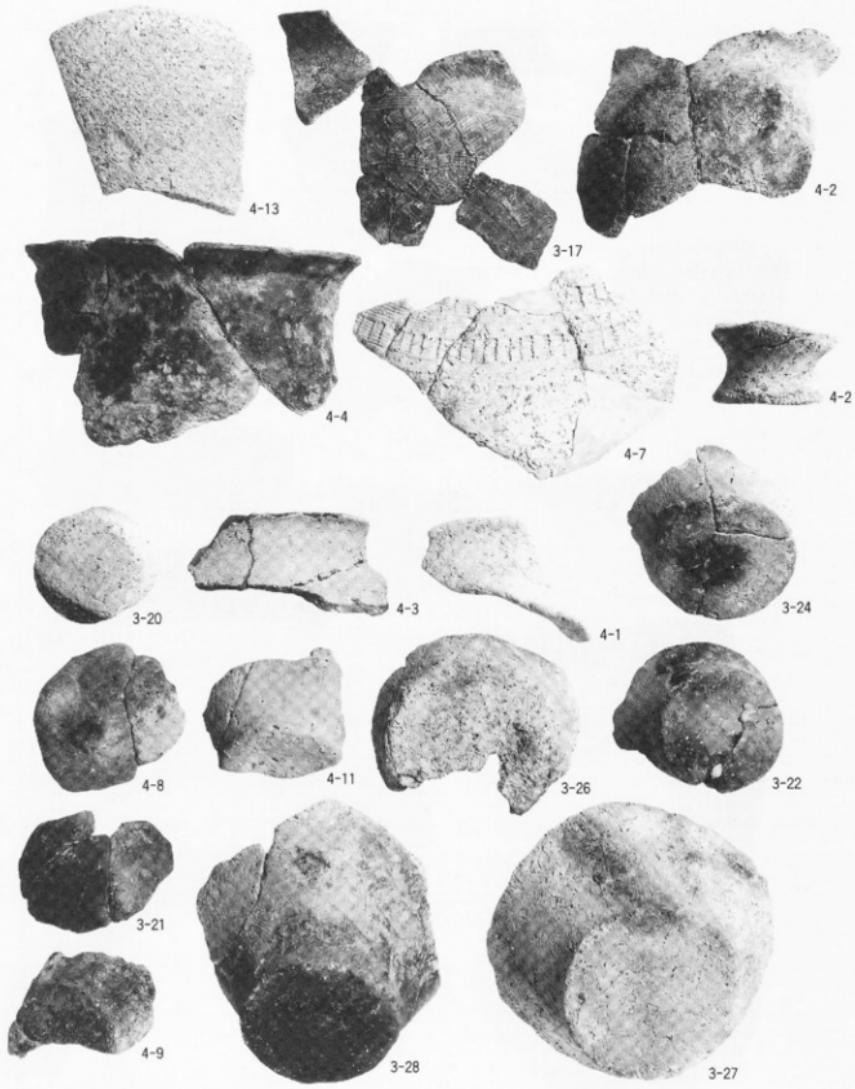
図版15 遺物写真 (縮尺1/2) 弥生土器 (図版1参照)



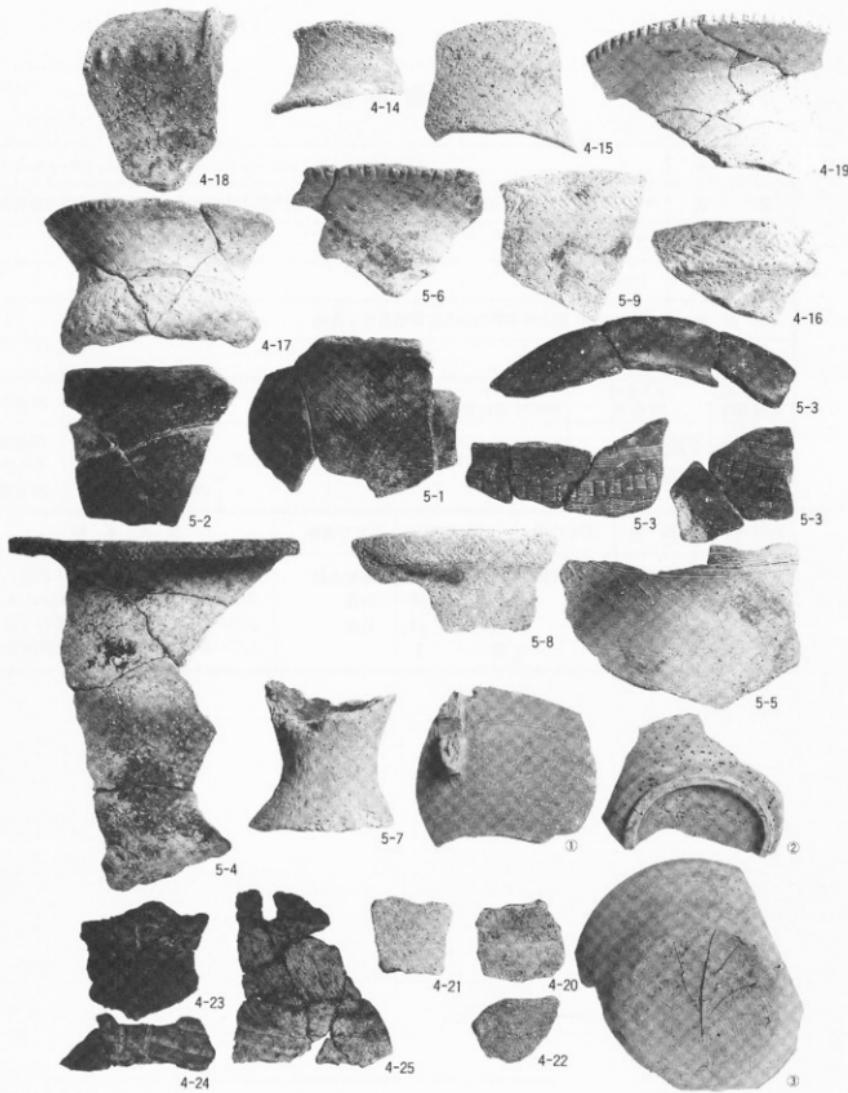
図版16 遺物写真 (縮尺1/2) 弥生土器 (図版1・2参照)



図版17 遺物写真 (縮尺1/2) 弥生土器 (図版2・3参照)



図版18 遺物写真 (縮尺1/2) 弥生土器 (図版3・4 参照)



図版19 遺物写真 (縮尺1/2) 弥生土器・須恵器 (図版4・5参照)

## 報告書抄録

ふりがな	とやまけん なかにいかわぐん かみいちまち ほうじがせきたいせき						
書名	平成10年度ひまわり台団地第3期造成に伴う 富山県中新川郡上市町放土ヶ瀬北遺跡発掘調査概報						
編著者名	上市町教育委員会						
編集機関	上市町教育委員会						
所在地	〒939-0353 富山県中新川郡上市町法音寺1番地						
発行年月日	1999年3月						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
ほうじがせき 放土ヶ瀬 北遺跡	なかにいかわぐん 中新川郡 かみいちまちはうこがせき 上市町放土ヶ瀬新	016322 322107	36度42分39秒	137度19分30秒	19980401 19980509	625	圃地造成 のための 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
放土ヶ瀬北 遺跡	墓	弥生時代	環状造構 2 土壤 16 穴 24 溝 1	弥生土器 石器 石材	弥生時代中期の遺構・遺物を検出した。 また天王山式系統の土器を検出した。 玉作の可能性を示す石材の剥片も出土 している。土壤は土壌墓の可能性がある。		

平成10年度ひまわり台団地第3期造成に伴う

**富山県上市町  
放土ヶ瀬北遺跡発掘調査概報**

発行日 平成11年3月31日

編集・発行 上市町教育委員会

印刷者 株式会社 チューエツ

